

原 著

ひきこもり親の会のリーダーの
内的体験からみえる支援の検討斎藤まさ子¹⁾ 中村 恵子¹⁾ 内藤 守¹⁾
田辺 生子¹⁾ 小林 理恵¹⁾ 盛山 直美²⁾

1) 新潟青陵大学看護学部看護学科

2) 新潟青陵大学大学院看護学研究科

Examination of support based on the experience of the leaders of the
Hikikomori parents' groupsMasako Saito¹⁾ Keiko Nakamura¹⁾ Mamoru Naito¹⁾
Seiko Tanabe¹⁾ Rie Kobayashi¹⁾ Naomi Moriyama²⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Niigata Seiryō University

2) Graduate School of Nursing, Graduate School of Niigata Seiryō University

要旨

本研究の目的は、セルフヘルプ・グループひきこもり親の会のリーダーが、自らの役割の基軸を見出すまでの体験のプロセスを明らかにするとともに、リーダーへの支援の示唆を得ることである。特に、関連機関との連携に注目した。各地で活動する親の会のリーダー6名に半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセスは、《実践からのゆるぎない確信》を得ることによって、【羅針盤獲得の後押し】と【社会貢献への使命感】を見出していくプロセスであった。支援は、会を運営するための経済面や専門的な学習への支援など会を運営するために必要な支援の他に、【羅針盤獲得の後押し】を促進させるアドバイザー的な専門家の支援の可能性について探る必要がある。また、【社会貢献への使命感】に依拠して、会の運営で得た知見やノウハウを一般社会への啓発や、ひきこもり支援に携わる専門スタッフの学習支援などに積極的に協力依頼する方向への示唆が得られた。

キーワード

ひきこもり親の会、リーダー、役割の基軸、支援、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Abstract

The purpose of this study is to reveal the process of experiences in which the leaders of a self-help group called Hikikomori parents' groups discover the foundation of their roles and to obtain the suggestions regarding the supports to them. Particular attentions were paid to the cooperation with concerned organizations. A semi-structured interview was conducted with six leaders of the parents' groups operating in various regions and the interviews were analyzed using modified grounded theory approach. The process in which the leaders of the groups discover the foundation of their roles was one to find 【support for acquiring compass】 and 【a sense of responsibility for social contributions】 by acquiring 《the irreplaceable assurance from practices》. Regarding the supports, it is needed to explore the possibility of the supports provided by specialist like advisors who promote 【support for acquiring compass】 other than the supports necessary for running the groups such as those for the financial and specialized learning to manage the groups. In addition, depending on 【a sense of responsibility for social contributions】, a suggestion was obtained in a way that the knowledge and know-hows acquired through the management of the groups are proactively requested to be utilized for enlightenment activities in ordinary societies, study supports to specialized staff members engaging in Hikikomori assistances, and other activities.

Key words

Hikikomori parents' group, leader, the foundation of roles, support, Modified grounded theory approach

I はじめに

内閣府¹⁾は、2019年3月に40～64歳のひきこもりが、全国で推計61万3千人いるとの調査結果を発表した。ひきこもりの高齢化、長期化が鮮明になるとともに、親も子も高齢化の一途をたどっており、高齢の親とひきこもりの子どもの家族の社会的孤立化が深刻な社会問題として注目されている²⁾。

セルフヘルプ・グループひきこもり親の会（以下、会）は、全国的組織や単独で活動するものまで様々な形で存在している。セルフヘルプには、全員が同じ立場で互いが助けあうということに大きな意味がある³⁾。特に親は、病気や障害があるとは思えないわが子がひきこもっている状況を理解できずに、着地点が見いだせないもどかしさで苦悩していることが多い。ひきこもりは背景が多種多様であり、先の見通しのないまま気持ちの寄る辺のない日々が長期間続く傾向にあることから、会の存在は特に重要である。さらに、会への参加で心理的が安定することから、子どもの心理面にもよい影響を与えており⁴⁾、親ばかりでなく、子どもにとってもひきこもり対策における会の存在意義は高いといえる。

一方、会を維持していくためには、運営する人（リーダー）の存在が不可欠であるが、2018年にKHJ全国ひきこもり家族会連合会が実施した保健所への聞き取り調査のなかで、行政主導の家族教室からセルフヘルプ・グループ（以下、SHG）へと移行を考えても、運営を担う人がなかなか現われない現状が指摘されている⁵⁾。また、SHGのリーダーの負担の大きさや後継者不足を指摘する研究もある⁶⁾。SHGの目的について高松⁷⁾は、問題の解決や軽減、問題との付き合い方を学ぶ、居場所づくり、情報交換、社会に対して働きかけることを挙げているが、自らもひきこもりの子どもを抱えながら、これらを実現するべくリーダーとして会の責任を担うことになり、その

負担感は想像に難くない。

ひきこもり支援には、地域における家族会や行政、支援機関同士のネットワークの重要性が指摘されており⁸⁾、リーダーの負担感を軽減するために何を支援すればいいかが明らかになることで、各構成団体が寄与できることがあるのではないかと考える。独りよがりにならない適切な支援ができるためには、リーダーが会を運営することで、実際にどのような内的体験があり、何をリーダー役割の基軸としているのかを明らかにする必要がある。SHGのリーダーに焦点を当てた研究論文として、林⁹⁾のSHGのリーダーの内的体験に関する研究、大松¹⁰⁾のがん患者会の運営のプロセスにおける継続要因や課題に関する研究があり、三好¹¹⁾はSHGの運営者の抱える3つの問題を明らかにしている。いずれも、SHGのリーダー役割における体験に焦点を当てており、本研究においても貴重な示唆が得られるものの、ひきこもりのSHGに特化したものではない。

本研究では、会と関連機関との連携に注目しながら、リーダーが会の運営をととして自らの役割の基軸を見出すまでの体験のプロセスを明らかにするとともに、支援の示唆を得ることを目的とする。

II 研究方法

1. 研究対象者

本研究の対象者は、A県内外で活動する会の代表者であり、2年以上会をリーダーとして運営してきた人とした。賛同が得られた4つの会のうち、2つの会は代表者1名ずつであり、他2つの会の1方は、同一の会の過去と現在の代表者2名であり、他1方は会の代表者が複数名いるうちの2名であり、合計6名を研究対象者とした。立ち上げから関わっている人が3名、他3名は後継者であった。

2. データ収集方法

対象者に半構造化面接を行い、会の運営について大切にしていること、うまくいったことや失敗したと思うエピソード、会の進行上での得意・不得意とすること、会の役割についてなどに焦点を当てて語ってもらった。面接内容は対象者の同意を得た上で録音した。面接場所は、遠方の場合はその地域の公的機関のカンファレンスルームや会の居場所で、近隣の場合は研究者の研究室で行った。いずれも静かでプライバシーが保持できる場所であった。データ収集期間は、2018年9月から2019年3月、面接時間は72分から90分であった。

3. 分析方法

分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach: M-GTA) ¹²⁾に基づいて行った。分析テーマは「セルフヘルプ・グループひきこもり親の会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセス」、分析焦点者は「セルフヘルプ・グループひきこもり親の会のリーダーとして会を運営している人」とした。データは、M-GTAの分析方法に基づき次のように分析を行った。まず、具体的で多様性のあるデータを選び、分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連個所に着目し、それを具体例とし、そのデータの解釈による概念を生成した。生成した概念は類似例の確認と対極例の比較の観点からデータを見ることで、解釈が恣意的に陥る危険を防ぐようにした。その結果を分析ワークシートの理論的メモ欄に記入した。データは継続的に比較分析し、概念を分類してまとめる作業を繰り返してカテゴリーを生成していき、結果図とストーリーラインを完成させた。なお、分析過程においては、M-GTAに精通する共同研究者間で意見の一致が見られるまで検討を行った。

4. 倫理的配慮

本研究は、研究者らの所属機関における倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号201706号）。対象者には、研究の目的と意義、方法、研究参加に伴うリスクと利益、参加の自由および途中辞退や回答拒否の権利や保護、プライバシーの保護、結果の公表等について口頭と書面で説明し、同意書の署名により研究参加の意思を確認した。

Ⅲ 結果

1. 研究対象者の属性

研究対象者の属性は、男性3名、女性3名であった。リーダーが複数名存在する会の2名は、同席して面接調査を行った。年齢は70歳代が2名、60歳代が4名であり、会が発足して6年から16年であり、代表経験年数は、2年から16年であった。全員が子どものひきこもりの経験者であり、子どもの状況として2名が外出可能レベルの準ひきこもり状態、2名が地域活動支援センターや中間就労施設に通所中、2名が一般就労を果たしていた。

2. 分析結果

分析の結果、1つのコアカテゴリー、5つのカテゴリー、18個の概念が生成された(図1)。

得られた結果について、概念には〔 〕、カテゴリーには【 】, コアカテゴリーには《 》を用いて示した。また、対象者の語った具体例は斜字体で示した。

1) ストーリーライン

セルフヘルプ・グループひきこもり親の会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセスは、他に役割を引き受ける人がいないという〔やむを得ない事情〕と〔会は不可欠なもの〕と捉えていたため、自らが【リーダーになる決断】をしてからは、会を〔休まず開催という責任感〕のもと、会では参加者の語りの〔聴き手に徹する〕こと、参加者の〔不

快感へのケアフォロー」や「新規参加者への心遣い」を行い、参加者からの「プラスの手応え」をもらう反面、「孤独な葛藤」を抱くことがありながらも【ほっとして語れる場の堅持】を行っていた。会を運営していく中で「親の変化で子の変化の実感」や、「変化の糸口は親の主体性」という《実践からのゆるぎない確信》を得て、参加者同士の「相互対話の有効性」を活用しながら「変化を目指すプランニング」を実施し、参加者が変化すべき方向を示す【羅針盤獲得の後押し】という基軸を見出していた。一方、【リーダーになる決断】をしてからは、公的機関とは「行政とつながるメリット」を活用し「財政難に頼みの公的支援」の利用、支援機関や専門職とは「専門的な学習の推進」への協力依頼や「心強い専門的立場からの助言」を活用するという【連携先の活用】をしており、これは【ほっとして語れる場の堅持】に影響を与えていた。【外部との連携活用】は、【実践の知見の還元と提言役割】や「孤立して悩む家族に届けたい」という【社会貢献への使命感】という基軸へと発展しており、《実践からのゆるぎない確信》が影響していた。

2) コアカテゴリー、カテゴリーと概念についての説明

(1) 【リーダーになる決断】

このカテゴリーは、「やむを得ない事情」、「会は不可欠なもの」、の2つの概念からなる。

会のメンバーの中で、自分以外に引き受ける人がいないことや、社会の理解が得られず孤立する中で立ち上げざるを得なかったこと、さらに、自分を含めて同じ思いを抱く家族の居場所が必須だという思いから、親の会のリーダーとなる決意をしたことを表している。

リーダーは、「する人がいなかったんですよね、本当に。しょうがなくやったんですよね。…誰もやってくれないんですよ」や「わたしたちが欲しかったんですよ、居場所…うちの子学校に行ってませんとか、ひきこもりしてますって一切言えない、環境の中で言えなかったから」というように「やむを得ない事情」によりリーダーを引き受けていた。

「皆さん、会はなくしてはいけないというね。親を支えていくというね、自分たちも支えられてきたし、これからもなくてはいけないという思いはみんな同じなんですよ」、「自分の子どもがどういう、このひきこもりで苦しん

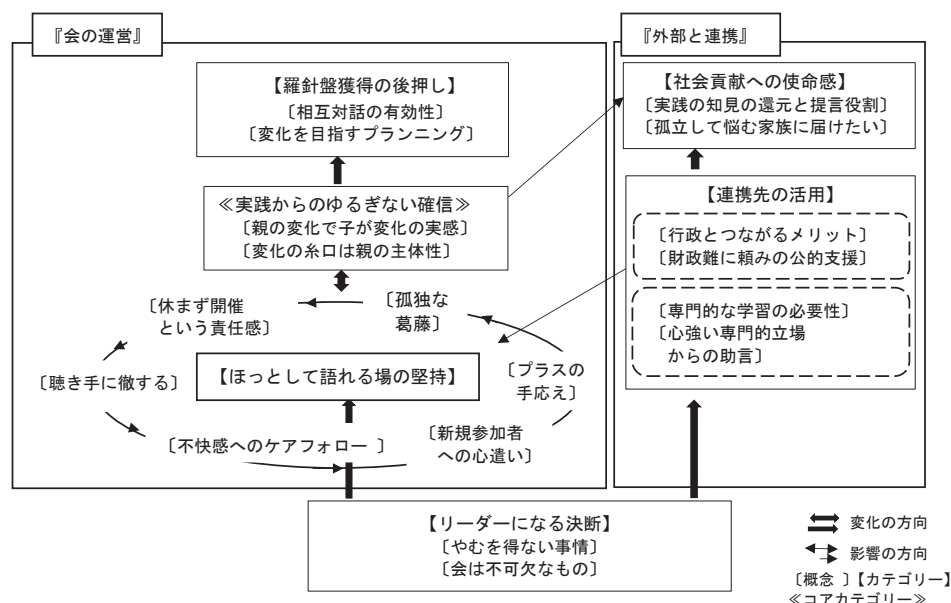


図1 ひきこもり親の会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセス

でいるかということをつからなきゃいけないので、分かるためには親の会があった方が非常に役に立つということで」のように、リーダーにとって「会は不可欠なもの」であった。

(2) 【ほっとして語れる場の堅持】

このカテゴリーは、「休まず開催という責任感」、「聴き手に徹する」、「不快感へのケアフォロー」、「新規参加者への心遣い」、「プラスの手応え」、「孤独な葛藤」という6つの概念からなる。

休むことなく開催される会で参加者の語りを聴くことを大切に、参加したメンバーに対して細やかな気遣いを行うなかで、参加者からのよい反応を励みにする反面、リーダーとして様々な無念さやジレンマを体験しながら、参加者が安心して話せる場を維持していることである。

「継続というのが非常に大事なものと感じていますからね…それがやっぱり、親の安心感というかな」、「会ができてから16年間、月例会も欠かさずやっているという。そういうことが会員とのパイプをつなぐんじゃないかな」というように、リーダーは会について「休まず開催という責任感」を抱いていた。

「共感して話を聴いてもらえるということはすごく大事なことですよね。それですごく元気が出てくるし、それで頑張ろうという気持ちになるしね。だから、大事にしているのは、とにかく聴くということ」、「できるだけ本当に相手に、相手がしゃべってくれることを自分がしゃべっちゃうといけないので……相手にしゃべってもらったりして、それも大事だな」というように「聴き手に徹する」ことを心掛けていた。

「親の会のなかで、来ている人が不愉快な思いをしないように、もうそれですね一番思うのは。ケアフォローに回る。それを必ずしなきゃいけないなと思っていますね」と、参加者に対して「不快感へのケアフォロー」を

行っていた。

特に新規参加者には、「最初に話してもらうのはやっぱり控えますね。ちょっときついんじゃないかなって思いまして。……ちょっと気持ちを落ち着けて、皆さんのやり方を見てからの方が話しやすいだろうなと思って最後に回しますね」というように、「新規参加者への心遣い」を行っていた。

これらの気遣いに対して「ほんとに話をして、ほんとにスッキリした表情で帰られる方がいて。かつて自分もそうだったと思い出しながら、会があって本当によかったと思えるのはそういうときですね」という「プラスの手応え」を参加者から得ていた。

その反面「意見を出さないのに文句を言われるばかりで本当に困りました」、「会はみんなで作っていくものだと思うので、不満があったら出てきて話してほしいです」や、「自分の生活も仕事もあるし…もっとやれば違うかもしれないのに、できていないということがたくさんあります」や、「これほど人が集まってくれるとは思わなかったし、でも誰もいなくなる時があって、会費ももらっていないし、どうするこれから先みたいな不安があります」、「これからの具体的な相談をやっているのですが、親の会では漫然とその人に任されている。そうするとなかなか先に進まない。だから、もうちょっと第三者的に計画相談の場をつくれる体制があったらどうだろうと。ピアじゃなく、支援者が欲しい。親同士は支援者になれないんですよね」など様々な「孤独な葛藤」を抱いていた。

(3) 《実践からのゆるぎない確信》

このカテゴリーは、「親の変化で子の変化の実感」、「変化の糸口は親の主体性」の2つの概念からなる。

リーダーは、会の実践をとおして親が子どもへの対応について反省し、子どもの存在価値を尊重するような対応に変化すると、子ど

もがプラスの方向に変化することや、親が主体的に子どもに正面から向き合う努力をすることが、子どもが変化する糸口だという確信をもてたことを表している。

「親が変化することによって、当事者に影響を与えて変わっていった例はいくらでもあります」や、「細かくあれしろ、こうしろと言わないことを母親は実践し5、6年続いたあるとき、車の免許を取りたいって……今は働いています」のように、会を実践することにより「親の変化で子が変化の実感」を繰り返し体験していた。

「参加してこられた方たちが、やっぱりどんどん変わっていかれ、お子さんも変化しましたね。それはやっぱり、親御さんも積極的になられた場合ですね」、「みんなで学習をしてお母さんが変わっていくことが、親が変わっていくことが、子どもが変わっていくということになるんじゃないの」と親にとって「変化の糸口は親の主体性」であるという確信を抱いていた。

（４）【羅針盤獲得の後押し】

このカテゴリーは、「相互対話の有効性」、「変化を目指すプランニング」の2つの概念からなる。

会を運営する上で親が変化するためには、集団での対話が有効であり、個々の参加者がどう変化すればいいのか、その方向付けが可能となるように、会の企画運営をすることである。

「集団の中の対話をどうやって運営するかが大事なことで、ずっとそれを14年間ぐらい続けてきてひきこもりの支援をするときにやっぱり対話だと。……対話をやることによって親同士すごく共感でき、癒されるなど思っ」や、「私もこういうふうに早めに何か対応したら、こういうふうにならなかったみたいな経験みたいなのを話していくというのがね、それがすごくいいんじゃないかな」と「相互対話の有効性」を実感していた。

「どうしたら親御さんたちが変わっていくか、それをずっと考えましたよね。どういう学習会をしたらいいか、どういうミーティングをやったらいいかというのを」や、「自分が気付いたことってやれるんですよ。だからいろんな講師さんにきてもらって……来てくれた人が、おうちへ帰ってじゃあとりあえず声をかけようかって、そういうふうに気づいてくれたことは、実践が長続きすると思ったんですよ」と参加者の「変化を目指すプランニング」を行っていた。

（５）【連携先の活用】

このカテゴリーは、「行政とつながるメリット」、「財政難に頼みの公的支援」、「専門的な学習の必要性」、「心強い専門的立場からの助言」という4つの概念から構成されていた。

行政とつながることで得られる安心感や信用、参加者募集や財政難対策として公的支援を利用すること、専門家とは専門的な観点から学び知識を得ることや、アドバイザー的な相談相手を得るなど、会を取り巻く組織や人々と連携しそれを活用することである。

「新しい会員が全然入ってこないというわけではなくて、ポツポツ入ってきてはいるんですね。それは県のピアサポート事業とか委託すると……宣伝していただけるので、紹介していただいて、相談に来られた方が会に入られる方もいるし」、「行政と一緒にやっていくということが安心感でもあるわけですね。いい加減なところじゃないということと、行政とつながっているということは行政も何かしら手伝ってくれるということがあるでしょうね」と「行政とつながるメリット」を実感していた。

「もう事務所をやめたんです。で、その代わりに、地域の安い公共施設を使って、親の会をやることにしました」、「財政難で、去年からピアサポート事業という県の事業を委託しているんですよ。年間の予算が20万円なん

ですけど」と、経費節減対策や補助金を活用するなど〔財政難に頼みの公的支援〕について語った。

「今はいろんな専門の支援機関がありましたね、例えば県の精神保健センターだとか…そういう相談機関の方に来ていただいて、そこでどういう支援をしているか、なるべく具体的なケースも出してもらって、どんな支援ができるのかというの、1つの柱にしています」、「例会は、1つは親の学習ということですね、それは専門家の先生とかに来ていただいて、ひきこもりの支援について話して頂くことが1つありますよね」、「会を存続していくためには、私たちも知識が求められている。経験が先で、知識がないですから、そこから知識を入れたから、少しは発信力があるのかなと思って」と例会への参加者のために、またリーダーとして〔専門的な学習の必要性〕を感じていた。

「ずっとアドバイザー的な存在で、講演、学習会に来ていただいたり、いろんなかたちで本当に助かっています」、「助言者といいますかね、専門家の人が「その考えでいいんですよ」というふうに、言ってくれることにすごく、やっぱり満足感というのかな、それがああると思うんですね」と会に関する専門家について〔心強い専門的立場からの助言〕が得られる人として捉えていた。

(6) 【社会貢献への使命感】

このカテゴリーは、〔実践の知見の還元と提言役割〕、〔孤立して悩む家族に届けたい〕という2つの概念から構成された。

当事者や家族が生きやすくなる社会構築に向けて、実践から得た知識や支援のノウハウを広く社会に情報提供する役割があること、さらに孤立しがちな不登校やひきこもり体験をしている家族に出てくるように呼びかけることが自らのなすべきことだと思っていることである。

「ひきこもりについて一般社会の理解は十分かといえば、ほど遠い状況だと思いますし、社会的条件の整備も不十分です。だから広く社会に働きかけて、ひきこもっている家族と当事者がより生きやすくなるように、社会を変えていくということがあると思います」

「専門機関じゃないけど、ある程度そういうノウハウというのは蓄積してきているので、いろんなところで役立てることはできるんじゃないかと思いますけどね」、「地域包括支援センターから高齢者の支援は私は分かるけど、ひきこもりの支援ってどうしたらいいか分からない。相談に乗ってくださいと電話があつてね」と、〔実践の知見の還元と提言役割〕があることを実感していた。

「講演会の演題とかを見てもしかして、その人たちが出てきてくれるかもしれないじゃないですか、淡い希望ですね」、「講演会のチラシを、発掘して掘り起こして全然そういうところへ出たことのない人のところへ持って行って、何らかの形になってくれればいいな」という〔孤立して悩む家族に届けたい〕思いがあった。

3) カテゴリー間の関係

このプロセスは、【リーダーになる決断】をしたリーダーが『会の運営』では【ほっとして語れる場の堅持】をするなかで《実践からのゆるぎない確信》を得ることで【羅針盤獲得の後押し】という自らの役割の基軸を見出していた。さらに『外部と連携』では【ほっとして語れる場の堅持】のために【連携先の活用】を行っているが、《実践からのゆるぎない確信》が影響して【社会貢献への使命感】という役割の基軸に発展していた。このように、《実践からのゆるぎない確信》を得ることによって、参加者が変化すべき方向を示す【羅針盤獲得の後押し】と、【社会貢献への使命感】という、2つの役割の基軸に発展するプロセスであった。

IV 考察

これまで、会と関連機関との連携に注目しながら、リーダーが会の運営をとおして自らの役割の基軸を見出すまでの体験のプロセスを明らかにしてきた。これを参考にして、リーダーへの支援について述べる。

1. 行政や支援団体、専門家が行う支援

【連携先の活用】の[行政とつながるメリット]では、会員募集のための広報の依頼や行政と連携していることで、会の信頼を得ることやリーダー自身の安心感につながっていることが語られた。さらに、[財政難に頼みの公的支援]では、地域の安い公共施設を使うことで経費節減対策をすることや補助金を活用するなどを行っていた。このように、行政とつながることは、経済的な支援や広報支援など具体的な支援を得ることができる。さらに、リーダーが心強さや安心感を持つことができるという心理面にプラスの影響を与えており、両者とも負担感の軽減に直接結びつくものと考えられる。

また、[孤独な葛藤]において、親同士は支援者になれないということで、ピアではない支援者による関与についての願望が述べられていた。専門家の関与について三好¹¹⁾は、体験的知識と専門的知識の協働というニーズについて、これまでSHGに専門家が介入することについては批判的であったものの、縮小傾向の現状を踏まえ、専門的知識の観点からSHGをエンパワメントしていくことが必要ではないかという考えを述べている。SHGの中では、メンバーは援助者と援助される側の両方の役割を取り、時には後者の役割を多く持つことがある¹³⁾といわれている。実際に[相互対話の有効性]が発揮され、体験を語りながらそこで出た疑問点についてメンバー間で意見を出し合う、小グループで語り合う、ピアカウンセリングなどの方法を取り入れるな

ど、援助者と援助される側の両方の役割を取りながら体験的知識の獲得を図っていた。しかし、ひきこもりに関する医療や福祉、心理などについての専門的な知識の獲得については、家族同士の意見交換では限界がある。斎藤ら⁴⁾は、体験的知識とともに専門家による講演会などの学習をとおして、子どもの理解が促進されることを明らかにしているが、講演会でなくとも会に参加することで体験的知識と専門家による専門的知識が得られるならば、変化すべき方向を示す【羅針盤獲得の後押し】になることは疑う余地もない。

今回の面接調査においても、3つの会で「心強い専門的立場からの助言」が得られるアドバイザー的役割を果たす専門家が関係していた。今後、会から距離を保ちながらも、会をエンパワメントできるような専門家の支援の可能性について検討していく必要がある。

2. 【社会貢献への使命感】に応える

リーダーになる決心をしてからは、【連携先の活用】を行っており、【ほっとして語れる場の堅持】を円滑に行うために、行政や専門家などの資源を活用していた。それが【社会貢献への使命感】という、利用する側から提供する側へと180度転換している。久保¹⁴⁾はSHGに共通してみられる特徴の1つとして、関連する制度を作ることへの働きや、啓発など社会に向けて働きかけることを挙げているが、[実践の知見の還元と提言役割]や[孤立して悩む家族に届けたい]は、これと一致している。《実践からのゆるぎない確信》では、リーダーは、親が子どもの存在価値を尊重するような対応に変化すると、子どもがプラスの方向に変化すること、さらに、親が主体的に子どもに正面から向き合う努力をすることが子どもが変化する糸口となるという、会の実践をとおして得た知見がある。これを、現在不適切な対応をしている家族や、子どもとともに孤立した生活をしている家族に届け

たいという思いである。さらに、「ひきこもりについて一般社会の理解は十分かといえ、ほど遠い状況だと思いますし、社会的条件の整備も不十分です。だから広く社会に働きかけて、ひきこもっている家族と当事者がより生きやすくなるように、社会を変えていくということがあると思います」という語りからわかるように、社会のひきこもりについての正しい理解の促進を図るために、知見を社会全体に還元したいという強い思いがあることがわかる。

また、「親の変化で子の変化の実感」はこれまでの研究で明らかになっているが¹⁵⁾、親がどのように変化すればいいのか、親が変化するための有効な対応策はどのようなものか、具体的な生活場面でどう対応すればいいのか、などの具体的なノウハウについては、支援者や専門職であっても十分とはいえないのではないだろうか。保健所を対象とした聞き取り調査によると、ひきこもり支援にあたるスタッフ自身が支援上の困難感を訴えているとともに、機関の課題としても保健師や心理士、精神保健福祉士などのスタッフの技術の向上や経験の蓄積の必要性⁵⁾が述べられている。このように、本人、家族はもとより、支援する側に対しても具体的な対策を講じることが求められている。相談の場、訪問の場、いずれにおいても有用な技術が身につけられれば、ひきこもりの長期化予防に貢献できる。

以上のように、一般社会のみならずひきこもり支援に携わる専門のスタッフにとっても、リーダーが培った知見は有用である。支援される側としてではなく、まさに協働でひきこもり対策にかかわる存在として対応することが、【社会貢献への使命感】に応えることだといえ、さらに、リーダーとしてのやりがいにつながるものと考ええる。

V 結論

リーダーが会の運営をととして自らの役割の基軸を見出すまでの体験のプロセスと、リーダーへの支援について以下の示唆を得た。

1. 会のリーダーが役割の基軸を見出していくプロセスは《実践からのゆるぎない確信》を得ることによって、参加者がどのように変化すればいいかの方向を示す【羅針盤獲得の後押し】と【社会貢献への使命感】を見出していくプロセスであった。

2. 会のリーダーへの支援は、会を運営するための経済的支援や会員募集のための広報、専門的な学習への支援など、行政や支援団体、専門家が行う現実的に必要な支援の他に【羅針盤獲得の後押し】を促進させるアドバイザー的な専門家の支援の可能性について探る必要がある。

3. 【社会貢献への使命感】に依拠して、協働でひきこもり対策にかかわっていく存在として、会の運営で得た知見やノウハウを、一般社会への啓発や、ひきこもり支援に携わる専門スタッフの学習促進などに積極的に協力依頼する。

VI 研究の限界

本研究は、セルフヘルプ・グループひきこもり親の会を運営するリーダーという限られた条件下の対象者に焦点を当てたものである。したがって、方法論的限定により、得られた知見もこの条件の範囲内において説明力のあるものである。6人という少ない対象者数であったことから、今後は継続して研究を進めていきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究者に親の会の運営について語ることにについて、快くご協力くださいました方々に深謝いたします。

なお、本研究は、学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）「ひきこもり支援におけるファシリテーター養成を核とした親の会との連携システムの構築」（研究課題番号17K12495）の助成を受けて行いました。

文献

- 1) 内閣府. 生活状況に関する調査（平成30年度）. <<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf-index.html>>. 2019年6月9日.
- 2) 川北稔. ひきこもりにおける8050問題. 地域保健. 2018; 11: 16-19.
- 3) 高松里. セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイドー始め方・続け方・終わり方ー. 19. 東京. 金剛出版; 2004.
- 4) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 真壁あさみ, 内藤守. ひきこもり親の会で母親が子どもとの新たななかかわり方を見出していくプロセス. 家族看護学研究. 2013; 19(1): 12-22.
- 5) 特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会. 長期高年齢化する社会的孤立者への対応と予防のための「ひきこもり地域支援体制を促進する家族支援」の在り方に関する研究 家族保健所等における「ひきこもり相談支援の状況」調査結果報告書 保健師さんのためのひきこもり支援実践ハンドブック～ひきこもる本人と家族を地域で支えるために～. 36-37. 2019.
- 6) 松本千晴, 荒木紀代子. セルフヘルプグループにおけるつながりの実態. アドミニストレーション. 2017; 23(2): 31-45.
- 7) 高松里. セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイドー始め方・続け方・終わり方ー. 14-15. 東京. 金剛出版; 2004.

- 8) 齊藤万比古. ひきこもりに出会ったらーこころの医療と支援ー. 31-32. 東京: 中外医学社; 2012.
- 9) 林貴子. セルフヘルプ・グループにおけるグループ運営プロセスの検討ーリーダーからみた組織運営要員の質的分析ー. 社会問題研究. 2012; 61: 113-126.
- 10) 大松尚子. がんの患者会運営のプロセスに関する考察. ルーテル学院研究紀要. 2010; 44: 79-92.
- 11) 三好真人. セルフヘルプ・グループ運営者の抱える問題の検討. 臨床心理学. 2014; 14(5): 693-703.
- 12) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践ー質的研究への誘い. 144-217. 東京: 弘文堂; 2003
- 13) 久保絃章. セルフヘルプ木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践ー質的研究への誘い・グループー当事者へのまなざしー. 134. 東京: 相川書房; 2004.
- 14) 久保絃章. セルフヘルプ・グループー当事者へのまなざしー. 142. 東京: 相川書房; 2004.
- 15) 斎藤まさ子, 本間恵美子, 内藤守, 田辺生子, 佐藤亨, 小林理恵. ひきこもり状態の人が支援. 144-217. 東京: 弘文堂; 2003機関に踏み出すまでの心理的プロセスと家族支援. 家族看護学研究. 2018; 24(1): 74-85.